様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２５年６月８日現在

機関番号：84310
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：22520118
研究課題名（和文）中国５世紀金銅仏の総合研究

研究課題名（英文）A Study of Chinese Buddhist Bronzes in the Fifth Century

研究代表者　外山　潔（TOYAMA　KIYOSHI）
公益財団法人泉屋博古館・学芸課・学芸員
研究者番号：30565578

研究成果の概要（和文）：　４～５世紀の五胡十六国時代の金銅仏を調査した結果、基準となる作例を抽出し、それらが５世紀前半に制作されたことを確認した。また中国風の様式をもつ像やガンダーラの影響を強く受けた像があることも確認し、この時期、多様な造像活動が行われていた状況を明らかにした。また５世紀後半の北魏時代には、強力な統一国家のもとで、新たな西方文化を受容して五胡期とは全く異なる造像活動が行われていたことを、像の様式、製作技法、材質等の面から明らかにした。

研究成果の概要（英文）：I researched on Buddhist Bronzes of Sixteen Kingdom Period and I picked out standard samples. As a result, I confirmed that they were created in early fifth century, and that there were Buddhist Figures of Chinese style and Gandhara style. People created various Buddhist Figures in those days, and moreover, I clarified that creating activities in Northern Wei Dynasty Period were very different from those in Sixteen Kingdom Period because of the strong unification of the nation and the new acceptance of West part of China. This difference was proved by their figures' style, creating technique and materials.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０１０年度	1,100,000	330,000	1,430,000
２０１１年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１２年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：美学・美術史
科研費の分科・細目：哲学　美学・美術史
キーワード：五胡期坐仏・漢民族・ガンダーラ仏・太和仏

１．研究開始当初の背景

現在遺る中国金銅仏は、持ち運び可能な小像が多い。それゆえに、それらは石窟像や大石像とは、用途あるいは様式が異なるものとして、中国仏教美術の重要な一側面を担っている。また金銅仏は石像、塑像と並ぶ仏像彫刻の主要なジャンルであり、その研究は中国のみならず、日本を含む東アジア仏教美術の研究にとって欠かせない重要な課題となっている。しかし中国金銅仏の研究は、石窟造像等に比べて遅れているのが現状である。金銅仏では、その信仰形態がどのようなものであったか、また石窟像と比較した場合に違いがあるか、さらには金工品として見た場合にどのような特色がみられるのかといった問題が重要となるが、これら諸問題も問題提起はされるものの、本格的な議論はほとんどなされていない。このように金銅仏研究が進まないのは、中国金銅仏の確実な出土例が少ないためではないかと思われる。つまり、中国金銅仏は基準作が少ないために、その真贋をめぐって議論の分かれるものが多く、研究資料として極めて扱いづらいものとなっているのである。それゆえにコレクション資料の中にも真贋の判断が保留されているもの、あるいは問題点が正面から議論されないままのものも多く存在している。このような状況を改善するには、金銅仏について、様式だけでなく、鋳造技法、材質分析等の手法も組み合わせて総合的な調査を行い、各作品に対する問題点を研究者が共有できる環境を構築することが必要不可欠ではないかと考える。

２．研究の目的

中国仏教美術の第一の高揚期である５世紀、五胡十六国時代から北魏時代前期に製作されたと考えられる作品群について、真贋を含む問題点を検証して確実な基準作例を見いだす。その上で、この時期の金銅仏がどのような様式変化を遂げたか、その変化の要因は何に起因するのか、さらに他の仏教美術関連作品と比較した場合の独自の特色、特に石窟寺院の造像との違いを明らかにすることを目的とする。

３．研究の方法

中国５世紀の金銅仏について、日本・アメリカの各博物館・コレクターが所蔵する作品及び中国出土品を精査。また一部は蛍光Ｘ線によって材質分析も実施した。この調査によって各作品の問題点（真贋・補修の有無等）を洗い出して、その位置づけを明確にするとともに、基準作となりうる作品を確定させた。また、この基準作品を中心として関連金銅仏の分類整理を行い、５世紀金銅仏の様式・形式の変化及び金銅仏の造形上の独自性を考察した。

４．研究成果

（１）．五胡期坐仏の新しいグループ

４世紀から５世紀前半にかけての五胡十六国時代の金銅仏は、禅定印を結ぶ坐仏が多数を占める。いずれも通肩の着衣をまとい、台座は台形状、その左右に正面向きの獅子を飾るという共通項を持つことから、類型化の進んだ作品と位置づけられることが多い。しかし、細かく見ると、これら五胡の坐仏にはいくつかの相違が見られ、それらはＡ～Ｄ群の４つのグループに分類できるとの先行研究（松本伸之「中国古式金銅仏の形式について」『和泉市久保惣記念美術館久保惣紀年文化財団東洋研究所紀要１』久保惣記念美術館 1988 年）がある。これは高さが 8～9 ㎝の範囲内での坐仏を、大きさ、作風、精粗の差等によって４分類したもの（以下、久保惣４分類と呼ぶ）だが、今回の調査では、この４分類の原型ともいうべき重要な作例を抽出することが出来た。それは、①河北省易県出土

像（『文物 98-7』図 1-2）②アメリカメトロポリタン美術館蔵像（矢代幸雄「健馱羅式の金銅仏」『美術研究、117 号』図 9-3）③出光美術館蔵像（『出光美術館蔵品図録-中国の工芸-』出光美術館、1989 年、図 339）④日本個人蔵像（『特別展　金銅仏』泉屋博古館、2004 年 図 2）の４例であり、今仮にこれらをＩ群と呼称する。このＩ群が他の五胡坐仏と異なる点としては次の６点が挙げられる。

１．高さが 12～13 ㎝と他の五胡坐仏と比べて大形である。

２．銅が厚く、肩と膝部は特に豊かな肉付となる。

３．両腕から膝部にかかる大衣を外側が八字形に拡がるように表現する（久保惣４群は、いずれも当該部の衣文はほぼ垂直に垂下しており、形式化した印象がある）。

４．頭髪を線刻等で丁重に表現する。

５．台座正面中央に蓮座と香炉の文様を立体的に表現する。また④以外の３例では、香炉左右に蓮華化生のような人物像を表現する。

６．②以外の３例では、台座側面に小孔を設け、③の出光美術館像では、蓮茎を差し込み、その先端に脇侍菩薩を載せる。

以上の諸点により、このＩ群は久保惣４分類とは明確に区別できる大形で作行の優れた作例と見なすことができる。また鋳造は、他の五胡仏と同様、前後２枚の合わせ型によると推定できるが、①のメトロポリタン像では、他例では見られない膝部と胸部の計５カ所に方形のスペーサーが確認でき、この像が技法の上でも、より丁重な製作であった様もうかがえた。さらに、このＩ群の作例中で、注目すべきは③の出光美術館像である。この像は、脇侍や坐仏が附属する横長の大きな光背と蓮茎状に立つ脇侍菩薩を伴うという類例のない作例であることから、その真贋について議論が分かれていたが、上述のようにＩ群の特色を完備することから五胡坐仏として問題がないと考えられ、今後積極的に評価すべきとの結論に達した。また①の河北出土像、④の個人蔵像の台座側面にある小孔も、出光像と同様、脇侍菩薩が立つ蓮茎を差し込んだ孔と考えられ、この像の本来の荘厳のあり方を示す物として重要な意味をもつものと結論づけられる。　そしてこのＩ群に比べると、久保惣４分類の坐仏は、いずれも小型化、形式化、簡略化が目立っており、その相違の背景には、王侯貴族と庶民といった需要層の違いがあったと推測できる。

（２）．五胡期坐仏に見られる中国風変化

五胡期坐仏には、面貌等にガンダーラをはじめとする西方の影響が強く見られることが既に指摘されているが、今回の調査では、顔貌や衣文表現に中国の影響を示すと思われる作例を抽出した。それは久保惣分類でＤ群とされるもので、この中に、彫りの深い西方風の顔貌とは対照的に、目鼻の彫りが浅い漢民族風の顔立ちの像があることを確認した。またこのＤ群は、胸前に拡がる大衣を角ばったコ字形につくるという極めて特徴的な表現が見られるが、同様の大衣表現は、フリア美術館蔵南朝劉宋元嘉２８年銘像（松原三郎『中国仏教彫刻史論　図版編１』吉川弘文館 1995 年　図 20）にも見られ、これが漢民族の美意識にかなった抽象的な衣文表現であったことも予想された。一方、このＤ群は、肩や膝を肉厚に作る点、台座正面中央に装飾文様を飾る点、大きな挙身光を伴う点などがＩ群と共通し、両者の関連が深いことが示唆される。ただし、台座の装飾文様が蓮華文様の浅浮彫ないしは線刻である点、挙身光が脇侍や化仏、天蓋を付ける舟形（甘粛省涇県出土像、河北省石家荘出土像、東京芸大美

術館像）（松原三郎『中国仏教彫刻史論　図版編１』吉川弘文館 1995 年　図 10、11、15ｄ）である点がＩ群と異なる。これらのことを総合的に勘案すると、Ｄ群は、Ｉ群を中国風に改変したものであり、その相違の背景には漢民族と胡族という需要層の違いのあったことが予想される。また、台座の蓮華文や光背、天蓋等のＩ群とは異なる装飾意匠は、五胡の民族とは異なる漢民族の美意識ないしは信仰形態を反映したものと推測できる。

（３）．五胡期坐仏の年代

サンフランシスコアジア美術館蔵石趙建武４年銘（338）像（松原三郎『中国仏教彫刻史論　図版編１』吉川弘文館 1995 年　図 6、7）は、紀年銘を持つ五胡坐仏の唯一の例として従来より大きな注目を浴びてきた。しかし、本像は高さが約 40 ㎝と五胡仏の中でも抜きんでて大きく、またこれ以降、年代の確実な仏像史料が 420～430 年の作品（炳霊寺 169 窟、北涼石塔）まで知られていないことから、本像はいわば孤立した作例となっている。実見の結果、本像の様式は上記Ｉ群とＤ群の特色を併せ持つことが判明したが、衣文の表現や表面研磨の状態にやや疑問が残り、取り扱いにはより慎重を期すべきと考える。一方、Ｄ群に属する甘粛省涇県出土像は、西秦の窖蔵から出土し伴出の銅印の官職名より、その年代が 430～431 年であることが明らかにされている。現時点では、五胡仏の年代を考える史料として、これが最も信頼できると考える。そしてこれを基準としてＤ群の年代を 430 年前後と考えると、その原型となったＩ群は 400 年代初頭と推定でき、この頃が五胡坐仏の盛期であったと考えられる。

（４）．西方風仏像の問題

五胡期仏像には、上記の中国風仏像とは対照的に、ガンダーラの影響を濃厚に留めるものもある。よく知られているものとして、藤井有鄰館蔵菩薩立像、京博蔵如来立像、フォッグ美術館蔵如来坐像（松原三郎『中国仏教彫刻史論-図版編-１』吉川弘文館 1995 年、図 1～4、8）がある。この中でも最もガンダーラの影響が濃厚に見られるのがフォッグ像で、その像容から西域製作説も出されている。しかし実見の結果、台座側面の比丘像等に中国風の影響が見られ、製作地が中国の可能性のあることが判明した。また像全体はガンダーラ仏を忠実に写しているが、台座正面の挿花装飾は、ガンダーラではなくインドのモチーフであること、作行きが極めて優れていること等も確認した。年代については判断が難しいが、近年、四川省からガンダーラ直模の６世紀代の石像が出土していることから、五胡期以降の可能性も考えるべきかと思う。有鄰館像や京博像によって、五胡期にガンダーラ仏の影響が濃厚に留める作例があったことは確実だが、フォッグ像はこれらとはやや異質な造形感覚が認められ、その位置づけは今後の重要な課題である。一方、これとは別にガンダーラとはやや異なる新しい西方タイプの五胡坐仏を西安で実見した（『西安文物精華－金銀器－』西安市文物保護考古所 2012 年、図 29）。これは高さが 12 ㎝、下ぶくれの顔で目が細く釣り上がり、類例のない独特の顔貌である。台座部は低く、断面は半月形を呈するのは、上記五胡坐仏のいずれにも見られない形式である。さらに、この像の最大の特色は、台座に西北インドや中央アジアで使用されていたカロシュティー文字で、月氏の一族のためにこの像を造った旨の銘文が記されていることである。類例のない像ゆえ、年代の特定は難しいが、下ぶくれの顔は、次代の北魏太和年間の金銅仏にも通じるところがあることから五胡末から北魏初期の可能性もある。そうであれば本像

は、五胡の分裂時代から北魏の統一前後における仏像様式変化の空白を埋める重要な史料として位置ずけるべきである。また本像に見られるカロシュティー文字の銘は、この時期、西安に月氏の移住者がいたことを示すとともに、各民族の好みによって、異なる様式の像が造られていたこと予想させる点でも重要と思われる。

ともあれ、このように一見変化が少ない５世紀前半の五胡期坐仏にも多様な変化があり、その背景には民族の違いが反映されていることが予想された。

（５）．５世紀後半、北魏時代前期金銅仏について

439 年、北魏の華北統一により、仏教造像は大きく発展した。金銅仏も薄い衣と量感のある肉体表現を特色とし、前代の五胡仏とは一線を画する大形像が多数製作された。この急激な変化は、五胡仏の自律的な発展とは考えられず、新たな西方からの影響によるもの、特に 439 年に涼州一帯（甘粛省）からの大量移民の影響が大きかったと考えられる。北魏前期の金銅仏は、その中心となる年号から太和仏と総称されているが、この時期の金銅仏を見ると、如来像では、姿勢は立像と坐像、また服制は偏袒右肩と通肩の２種に大別でき、菩薩像では蓮華手で上半身裸のものが多い。これらの像の形式はほぼ一定しており、この時期の金銅仏が一つの手本を元にして製作されていた可能性が考えられた。また製作技法の点では、五胡坐仏が四脚坐と本体を別鋳で製作するのに対し、この時期の坐仏では、両者を一体で作るなどの変化が見られ、鋳造技術でも進歩したことが確認できる。一方、蛍光Ｘ線分析で、五胡期と北魏太和年間の金銅仏をいくつか分析したが、その結果、五胡仏は、銅が 90％前後、錫、鉛が 3～5％前後であるのに対し、太和仏は銅が 80％前後、錫、鉛が 7～10％前後の値を示すもののあることが確認できた。このように北魏になると、金銅仏は作風、大きさのみならず鋳造技法や青銅の成分にも変化が見られるが、こうした変化は、いずれも北魏が国を挙げて仏教を崇拝し、造像が急速に発展進歩したためかと思われる。いずれにせよ、北魏前期の金銅仏は、強力な統一国家のもとで誕生したもので、五胡期坐仏とは、全く異質の性格をもっていたと結論づけられる。この点は雲岡石窟を代表とする石窟像の発展とも軌を一にする現象であったともいえよう。

６．研究組織

(1)研究代表者

外山　潔（TOYAMA　KIYOSHI）
公益財団法人泉屋博古館・学芸課・学芸員
研究者番号：30565578

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

松本　伸之（MATUMOTO　NOBUYUKI）
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部長
研究者番号：30229562

曽布川　寛（SOHUKAWA　HIROSHI）
研究者番号：90027558